

























田中一村の生涯

本名 田中孝 明治41年7月23日、栃木県下都賀郡に生まれる。幼い頃から画才を現し、7歳のとき児童画展で文部大臣賞を授賞する。大正15年東京美術学校（現東京芸大）に入学し、日本画科を専攻。同期に日本画壇の主流を歩んだ東山魁夷らがいた。しかし、入学後間もなく諸々の事情が重なり、わずか3ヶ月で中退した。

昭和13年、東京から千葉に移住。その間、襖絵や天井画の作品を描く。

昭和22年、第19回青龍展に「白い花」を初出品し入選したが、以後画壇との接触を断ら、絵筆一本の放浪の旅に出る。

昭和33年の暮れ、奄美を訪ねた一村は、ここを終生の地と定め、大島紬の染色工として働きながら、奄美帯の野生的な植物、原色調の魚類、動物等を20年にわたる制作活動のモチーフとして約30点の作品を残し、昭和52年9月11日、69歳で孤高の生涯を閉じた。

昭和59年12月9日、NHK教育テレビ「日曜美術館」で「黒潮の画譜－異域の作家田中一村」と題して、一村の画業が全国に紹介され大きな反響を呼び、翌年1月、同番組としては異例の再放送となった。奄美帯の植物群を画面いっぱい、しかも細密に描かれたその作品は、独特な幽玄さを秘め今も多くの人々を魅了してやまない。

名瀬市絵観光課



贈 国際ロータリー第2730地区
名瀬中央ロータリークラブ創立20周年記念事業
平成11年4月24日



































